

〔雲萍雜誌二〕洛の七條に淨味七郎兵衛といふ釜師あり、家富さかえて、多くの人を仕ひけるころ、伏見に人相をよくするものありて、ある時、淨味を見ていひけるは、御身今は何ひとつ不足なれども、五十歳を超えて後には、かならず乞食ともなるべきほどのあしき相あり、つゝしみ給へといふによりて、淨味予<sup>○</sup>柳澤<sup>里恭</sup>に問けるは、人相はしかとしたる書にも出侍ることにやといへるに、予答ていふ、人相の書くさぐりありて、その理かならずあることなり、<sup>○</sup>中されば御もとも、人相をみせられしところ、則ち乞食の相をまうけ出したるなれば、果したまへといふに、淨味は頭をふりて、身の持やうによるべし、相を果すなど、はその意を得ざることなりとて歸りぬ、それより淨味は、四十五六のとしよりして、おひくよからぬことゝもありて、そのみつひに零落におよび、八年がほど過て、清水坂に乞食となりぬたるを見し人ありとかたりぬ、淨味七郎兵衛は、阿彌陀堂といふ釜をはじめて摸せし釜師の上手なりき、

〔春雨樓叢書十一〕相學奇談

ある人語りけるは、淺草邊の町家に居ける人、甚相術に妙を得たり、予友人も、其相を見せけるに、不思議に未前を云當けるが、爰に麴町邊に有徳なる町家にて、幼年より召仕手代にて、取立店の事も吞込、實體に勤ける故、相應に元手金をも渡し、不遠別株に致せんと心掛しに、或日彼手代、相人の方へ來りて相を見せけるに、相人の云く、御身は生涯の善惡を見る沙汰にあらず、氣の毒なる事には、來年の六月の頃にて、果て死んと云ければ、彼もの大に驚き、猶又右相人委細見届、兎角死相ありと申ければ、強て實事共思はねど、禮謝して歸けるが、兎角に心にかゝりて、鬱々としてたのします、律義なる心より、一途に來年は死んものと觀じて、親方へいとまを願ひける、親方大におどろき、いか成譯有てと尋ければ、さしたる譯も無れど、只出家の心あれば、平に暇を給るべしと望し故、しからば心懸置し金子も可遣と云ければ、元より世を捨る心なれば、若入用あら